

1 研究の趣旨

東日本大震災は、私達を絶望の底へ突き落とした。ライフラインの遮断により、何不自由なく、食べ物や物資を購入できなかったり前の生活ができない初めての経験。しかし、そのことが家族や地域の人々との関わり、衣食住、消費や環境など家庭科教育の全ての内容に関わり、生徒の問題意識や学習意欲を高め、生活を創造する「生きる力」の育成につながるのではないかと考え本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 技術・家庭科3年間の授業構想
 生徒1人1人の思いや願いを重視し、実現させるために身近な生活の問題に気付かせ、自らの課題を設定させ解決へと導いていった。

(2) 17時間の指導計画
 課題意識を持たせ、指導計画の中の消費と環境で考えられる問題について話し合わせ、どちらか一方を選択させ、自己課題(テーマ)をつかませた。

(3) 震災の実態
 震災の前後で比較すると、食の選択や摂取、水や電気の使用に対する意識は、肯定的な回答(『はい』『どちらかといえばはい』)が男女共3～4割から9割へと増えた。当たり前で生活していた生徒にとって、お金があっても、自由に食品や燃料を購入できない苦痛が生活の意識を変えた。

(4) 問題解決的学習
 震災後の生活を振り返り、新聞から学んだ風評被害の対策や再生可能エネルギーについて興味や関心を持ち、自らの課題を解決し、私達にできる実践可能な具体的な内容を自己評価表で共通理解を図ることで、広く深い知識を共有できた。

(5) 自己評価段階
 レーダーチャートによる授業準備、自己課題の決定・解決、授業内容に応じた達成基準の自己評価と相互評価や学習の振り返りを行い、次の学習に生かした。

(6) 実践的・体験的な学習
 インターネットを活用して、材料や製作方法を検索し、機能性や装飾性を考えさせ、更にレベルの高いオリジナル作品が完成した。実際に作業を進めて分かることも多く、簡単で効果的な方法を見つけたことが本当の学びであることを再認識できた。実践力の育成が大切だと実感し、気付かせ考えさせる時間や機会を設定し、経験を積み重ねることにした。

(7) 検証、成果と課題
 震災から2年後『学んだ事を意識して生活しているか』『生活に役立てたいか』『震災で学んだ事を伝えたいか』の項目で、男子の方が女子より『はい』と答えた生徒が多かった。肯定的な回答は、どちらも100%かそれに近い数値を示している。『作品集を見て、興味を持ち制作したいか』に対して肯定的な回答は、84%である。2年次の生徒の思いや願いがほぼ達成できたと言える。

(8) 1年次と2年次の学習に関する結果を比較すると、男子はどの項目も2年次の方が上回っている。1年次の反省を生かして、学習内容の精選と製作時間や材料を確保し、上つまずきを予想して個に応じた適切な支援ができた結果と考える。

3 成果と今後の課題

震災などの災害を含め、これから先も目まぐるしく変化する社会的に主体的に対応できる生徒の育成を図る。これは、問題解決的学習や実践的・体験的な学習が有効であるとする。この3年間、家庭科での学びは、生徒達に衝撃を与え、心を大きく揺さぶった。このように考える。また、この学習で、生徒達は家族や地域の人達との「絆」、「共同体」を支えたいという思いや「物の大切さ」を身をもって体験したいという思いが、今思ひやりと願ひつらなりました。生活を取り戻しつつある今、震災直後の悲惨な記憶も薄れ、実践を通して、真の「生きる力」を身に付けさせたい。